

オーガナイザ 藤川直也(東京大学)  
提題者 和泉悠(南山大学)  
鈴木貴之(東京大学)  
藤川直也(東京大学)

従来の言語哲学における中心的関心、あるいは主流の言語哲学の課題と呼べるものがあるとすれば、それには次のものが含まれるに違いない(これらは言語哲学の標準的な教科書である Lycan (2000) で扱われている話題からとってきた)。

- 固有名と確定記述の指示と意味(ラッセルの記述の理論、記述説、直接指示論など)
- 指標詞・指示詞の意味、より一般に文脈依存的表現の意味(二次元可能世界意味論など)
- 文の意味(使用説、真理条件的意味論、検証主義の意味論など)
- 発語内の力(言語行為論)
- 推意(会話的推意の理論など)

ここに、複合表現の意味の合成性、前提と照応と文脈のダイナミクス、様相や命題的態度など様々な不透明な文脈、真理と嘘つき文などを含めることにも異論はさほどないだろう。

言語哲学の最近の動向の一つは、従来の言語哲学では中心的に論じられてこなかった社会的、政治的、倫理的問題への関心の高まりである。こうした動向を紹介する最近の言語哲学の入門書(Cappelen and Dever 2019)で扱われるのは次の話題だ。

- うそとミスリード、欺き
- デタラメ
- ジェンダーや人種に関する既存の概念の改良(概念工学)
- 中傷、侮蔑、差別表現
- 様々な非認知的な語彙効果(言葉に伴うイメージなど)
- 総称文にまつわる誤謬と倫理的な問題
- 一対一ではない状況での会話、SNSでの言語使用
- 言語的な抑圧、沈黙させること(silencing)
- 同意・不同意

こうした実践的課題に取り組む言語哲学の試みを、ここでは**応用言語哲学**と呼ぶことにしよう(概説として、Cappelen and Dever 2019、和泉 近刊、Khoo and Sterken (eds). 2021。「応用言語哲学」は、雑誌 *Ratio* の2020年12月の特集号のテーマである)。

応用言語哲学の一つの柱は、**概念工学**である。概念工学の代表的研究者であるハスランガーは、私たちが今もつジェンダー概念や人種概念を改良することによって、社会にポジティブな変革を生じさせることを試みている。より一般に、概念工学とは、(1) 既存の概念(だけでなく、言語表現も含む私たちの表象装置)の評価、特にそれが抱える様々な問題の指摘、(2) 既存の概念の改良案・代替案の提示、(3) 改良版・代替版の概念の社会的実装の3つを柱とする研究領域である(cf. Cappelen and Plunkett 2020)。現在の概念工学研究には二つの方向性がある。一つはジェンダー概念や真理概念といった具体例に対して概念工学を実践するという方向、もう一つは、概念工学の基礎についての研

究である。後者における問題には次のようなものがある。

- そもそも概念とはどのようなものなのか。
- 概念の評価はどのような観点からなされるのか。
- 概念を改良する、あるいは新たな概念を作り出すというのはどのようにしてなされるのか。
- 改良された概念、新たな概念を社会に流通させるといっようなようにしてなされるのか。

これらの基礎論的な問いに対しては、概念工学者の中でも様々な立場があり、標準的な見解といったものはまだない。

本ワークショップでは、応用言語哲学と概念工学という言語哲学の新機軸を紹介しつつ、ライカンの教科書が紹介するような従来の基礎論的な言語哲学と、応用言語哲学、概念工学の3つの関係について考察する。応用言語哲学は基礎論的な言語哲学とどう関係するのだろうか——たとえば、応用的課題に取り組むことが基礎理論に含意をもつとすればそれはどのようなものなのか。概念工学の基礎問題に取り組むにあたって、基礎論的な言語哲学や応用言語哲学の研究はどう役立つのだろうか。こうした問題意識のもと、和泉、鈴木、藤川が以下の発表を行う。

和泉は、ヘイトスピーチの意味論・語用論、総称文の使用に伴う倫理的問題などに関してこれまで進めてきた自身の応用言語哲学的研究を踏まえつつ、言語哲学における応用的課題と基礎的課題の相互作用について論じる。

鈴木は、概念工学プロジェクトが、言語哲学の知見を哲学方法論ないし哲学一般に還元するものになっている(あるいは哲学も言語を用いた営みである以上、哲学に関する言語哲学的な分析も可能であり、その一つのあり方が概念工学プロジェクトになっている)という観点から、概念工学の理論的基礎についての最近の議論を整理し、概念工学が哲学全体に対してもつ含意について考察する。

藤川は、応用言語哲学と概念工学の交わる新たな研究分野として、言語行為工学なる分野を提案する。概念工学が概念について論じてきた論点——概念の評価、改良、社会実装——が言語行為についても全くパラレルに論じられる——言語行為の評価、改良、社会実装——ということ、さらに言語行為工学がもつ応用言語哲学や概念工学に対する影響の見通しについて論じる。

文献

和泉悠 近刊、『悪い言語哲学入門』、ちくま新書

Cappelen, H. and J. Dever 2019. *Bad Language*, Oxford: Oxford University Press.

Cappelen, H and D. Plunkett 2020. Introduction: a guide tour of conceptual engineering and conceptual ethics, in Burgess, A., H. Cappelen and D. Plunkett (eds.) 2020. *Conceptual Engineering and Conceptual Ethics*, Oxford: Oxford University Press, pp. 1-26.

Khoo, J. and R. K. Sterken (eds.) 2021. *The Routledge handbook of social and political philosophy of language*, New York: Routledge.

Lycan W. G. 2000. *Philosophy of language: a contemporary introduction, second edition*. (荒磯敏文・川口由起子・鈴木生郎・峯島宏次訳、『言語哲学…入門から中級まで』、2005、勁草書房)